ルポ 潮流

随時掲載

美術家と〝おっちゃん〟協働

釜ケ崎の異色の宿

日雇い労働者の街として知られる大阪・釜ケ崎に、現代美術家と街の〝おっちゃん〟が協働してつくった異色の宿がある。昨年オープンした「ゲストハウスとカフェと庭ココルーム」。一体どんな空間なのか。体感すべく、釜ケ崎を訪ねた。

奇想天外

フリーダ・カーロやチェ・ゲバラ、アインシュタインにマリリン・モンロー…。ココルームの特別室「森村泰昌ルーム」は、まるで小さなギャラリーだ。壁一面が作品ポスターに覆われ、どこを向いても森村さんが扮した「誰か」と目が合う。ポスターの隣にあるのは、地元の日雇い労働者、坂下範征さんによる数編の詩。

「誰かが我より／先に生まれたこと／誰かが我より／先まで生きるということ」

壁に貼られた歴史上の人物たちが、ささやく言葉のようにも読める。

坂下さんと世界的な美術家である森村さんが、ここでは対等の表現者。2人をつないだNPO法人「こえとことばとこころの部屋（ココルーム）」代表で詩人の上田假奈代さんは言う。

「おっちゃんたちの表現は、奇想天外でとにかく面白い！　これは、次世代を生きるための知恵になると思うんです」

きっかけ

上田さんが釜ケ崎の商店街にカフェを開いたのは2008年。日雇い労働者の高齢化や孤立化が進み、街の様相が大きく変わり始めた時期だ。

「生活保護を受け、精神的な負い目から引きこもる人が増えた。店で待っていてもおっちゃんたちは来てくれない。交流を促すためのきっかけが必要でした」

11年には、地域の施設を会場に、詩やダンスなどの表現を行うワークショップの「出前」を始める。当初から参加したのが、妻の死をきっかけにアルコール依存症になり、断酒を始めたばかりの坂下さんだった。

ココルームの「森村泰昌ルーム」（大阪市西成区）

ワークショップに参加後、坂下さんが「酒は抗酒剤ではなく、人生の楽しみでやめるんだ」と言うのを聞いて、上田さんはハッとしたという。

「芸術は全ての生活の中にあっていい。こういう場を、地域にもっと埋め込んでいけないか」

その翌年、詩や哲学などの講座を無料で開催する「釜ケ崎芸術大学」（釜芸）を開校した。

深い部分

森村さんら多彩な講師陣が参加した釜芸は注目を集め、14年には横浜トリエンナーレにも参加。おっちゃんたちの詩や絵画は大反響を呼んだ。

しかし、街には新たな変化が押し寄せる。数年前からココルームのある商店街に外国人経営のカラオケ居酒屋が急増。おっちゃんたちの関心や生活費が、仲間との交流よりも娯楽に向かうようになってしまったと上田さんは感じている。

他の支援団体から「この街に芸術なんて…」という声が上がったこともある。「どうやってココルームや『釜芸』の求心力を保っていくか。正念場です」と上田さんは吐露する。

ゲストルームを訪ねた日、ココルームの近くで開催された釜芸の詩の講座に、記者も参加した。「詩」と聞くだけで肩に力が入ってしまう記者とは違い、おじさんたちは気負わず、するすると言葉を紡いでいく。参加者の一人、日雇い労働者のアーサーさん（仮名）はこう語った。「詩なら、自分の内側の深い部分を見せることができる」

「表現とは、生きていくためのすべ」。上田さんの言葉が頭に浮かんだ。

大岡信ことば館で開催された「釜芸がやってきた！」展（静岡県三島市）

釜芸展　生きる悲哀と明るさ

釜ケ崎芸術大学（釜芸）の「生徒」であるおっちゃんたちの作品を集めた展覧会「釜芸がやってきた！」が、静岡県三島市の大岡信ことば館で開催されている。笑いあり、涙ありの雑多でパワフルな作品からは「芸術って一体なんだ？」という声が聞こえてくる。

「学びたい人が集まれば、そこが大学」というコンセプトで始まった釜芸には、詩人の谷川俊太郎さんや、哲学者の鷲田清一さんらも賛同。会場では、おっちゃんたちの「つぶやき」を立体化した作品が、来場者を迎える。

「就職列車で来たからね」「ここはホンマの自由やから」「ぼくは罪深い男だ」

ユーモア、諦め、喜び、希望…。言葉と一緒に、それぞれの人生が立ち上がってくる。他にも絵や書、詩に仏像など多種多様な作品がコラージュのように並ぶ空間は、不思議な明るさと一体感に満ちている。人が生きることの悲哀を受け止めてきた、釜ケ崎という街そのものの雰囲気なのかもしれない。

学芸

ポスト震災を語る ④

美術家　五十嵐　靖晃さん

「海からの視座」に学ぼう

「水際には、物言わぬ世界ときちんと向き合いながら生きてきた人々がいる」。こう語るのは、東日本大震災が起きる前から、海沿いの地で地元の人と共にアート作品を制作してきた現代アーティスト、五十嵐靖晃さんだ。肌で学んだその感覚を「海からの視座」と表現する。

6年前、テレビで津波の映像を見て「もう、どんな作品をつくってもかなわない」と感じた。土地の記憶や歴史を掘り起こすことで、人々の視点を変えるような作品を目指してきたが、「津波がこれまでの価値観をきれいに流し去った。その衝撃の前で、アートは無力だと思った」。

何ができるのかを自問しながら岩手県釜石市へ入ったのは2011年の冬。仮設住宅には、船が流され、海へ出られない漁師たちがたくさんいた。五十嵐さんは、船具店に流されずに残っていた糸を使い、仮設の人々と一緒に漁網を編み始める。「そらあみ」と称したアートプロジェクトで、人と土地の記憶をつなごうという試みだった。

「海辺には、海辺に伝わる『所作』がある。一緒にまつわる記憶をぽつりぽつりと語った。

1カ月かけて編み上げた色とりどりの漁網は、近くの運動場で空に掲げられ、完成を祝う宴会には地元の漁師たちが取ってきた魚の料理が並んだ。海の中でアワビがどのように育つかを語り、「船さえあれば生きていける」と胸を張る漁師たちは「本当に生き生きとしていた」。

その後、津波で被害を受けた宮城県の塩釜市や松島町でも「そらあみ」を展開。塩釜の浦戸諸島は、ほぼ島ごと津波にのみ込まれてしまったこと。人々は、家を失ったこと。人々は、手を動かしながら、震災に遭げて無事だったことを知る。

「島の人たちはよく海を見て、変化に気付くことができた。毎日命を危険にさらしながら海へ出ている人はわれわれとは全く違う視座を持っている。文字通り『水先案内人』のように」

それなのに、被災地では防潮堤の建設が進み、海は、むしろ人々の目から隠されていく。「復興」とは一体何なのか。

「自分は、その土地で人々が誇りを持って生きていけることだと思う。東北沿岸部の人々は今、どのように自然と向き合い、生きていくかをいや応なしに考えている。今後、彼らの視座から学ぶことは多いはずです」

＝おわり

感想をお寄せください。〒780-8572高知本町局私書箱40号、学芸部。メールはgakugei@k